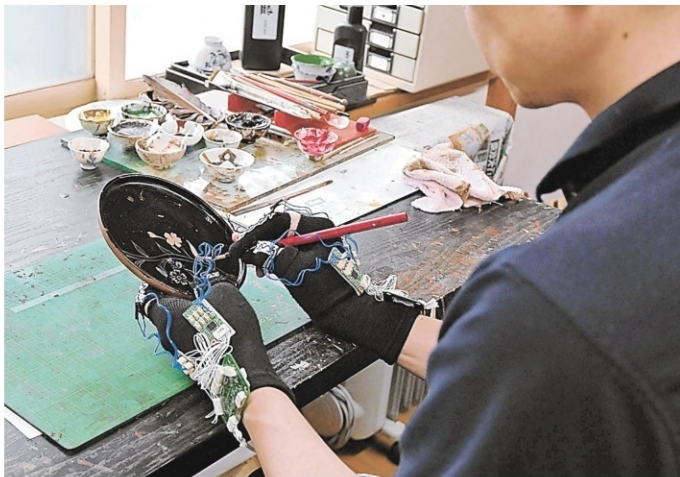




熟練職人がグローブを装着し、蒔絵を施す手指の動きを計測する実験

器漆津会 技の熟練 データ化

東北工大の室山教授ら実証実験

会津漆器の熟練職人の技をデータ化して集積し、後世へ継承する実証実験が始まった。東北工科大学部の室山眞徳教授（超集積システム研究室）が会津若松市のシステム開発会社津ラボと協力して職人が制作する際の手指の動きを計測し、集めた情報を若手の技術習得などに生かす。後継者不足が課題となる中、業界関係者は「繊細な技を可視化できれば継承につながる」と成果に期待を寄せる。

室山教授は名城大の研究室とともに文様を施し、粉をまく工程を計測した。グローブで指の動きや力加減を記録しながら、3次元カメラで手や道具、器の位置関係、距離などを研究開発している。カメラに

待を寄せる。漆蒔絵工房照井の照井克弘さんは「データから技をどこまで再現できるか見守りたい」としている。

会津漆器業界は職人の高齢化や担い手減少に直面している。市商工課によると、会津漆器協同組合の7月現在の木地師・塗師・蒔絵師を合わせた事業者数は48で、2015（平成27）年の81事業者から約10年で33事業者減少した。会津漆器技術後継者訓練校での育成や、地域おこし協力隊としての雇用などを進めるが、技術習得には

若手職人育成支援へ

よる全身骨格の計測に加え、装着型のセンサーから手や腕の動き、力加減を読み取り記録する。会津ラボが研究に着目し、室山教授に

室山教授はグローブを教材のよきに活用し、初心者と熟練者の動きや力加減の違いを振動などで伝えるシステムの開発を構想してい

長い年月を要し、雇用先の確保も課題となっている。

職人が後進に伝えるのは手の動きなど目に見えるものだけではなく、感性といった形のない要素もある。会津塗技術保存会の須藤靖典会長は新たな試みを歓迎する一

案。職人との実証実験をつないだ。初回の実験は9月に会津若松市の三義漆器店と漆蒔絵工房照井で行った。本格的なデータ収集に先

立つ試行的な実施に位置付けた。職人は指先にセンサーを取り付けたグローブを装着。三義漆器店では、はけで漆を塗る動作と拭き取る動作、漆蒔絵工房照井では漆器

の構築などを進める。

会津漆器は、木地師、塗師、蒔絵師といった専門の職人による分業制で作られる。三義漆器店の曾根典弘常務は「木地、塗り、蒔絵りを探索し、会津の伝統工芸を盛り上げていきたい」と話した。

会津漆器は、木地師、塗師、蒔絵師といった専門の職人による分業制で作られる。三義漆器店の曾根典弘常務は「木地、塗り、蒔絵りを探索し、会津の伝統工芸を盛り上げていきたい」と話した。

会津漆器は、木地師、塗師、蒔絵師といった専門の職人による分業制で作られる。三義漆器店の曾根典弘常務は「木地、塗り、蒔絵りを探索し、会津の伝統工芸を盛り上げていきたい」と話した。

会津漆器は、木地師、塗師、蒔絵師といった専門の職人による分業制で作られる。三義漆器店の曾根典弘常務は「木地、塗り、蒔絵りを探索し、会津の伝統工芸を盛り上げていきたい」と話した。